

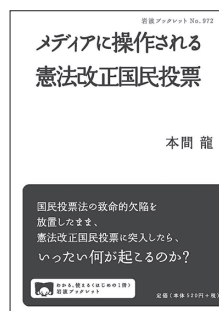
書評01

本田 由紀 著

『社会を結びなおす』 ～教育・仕事・家族の連携へ

岩波ブックレット／2014 年 6 月刊／56 ページ／520 円＋税
ISBN 978-4-0027-0899-7

評者：上掛 利博
京都府立大学教授



本田由紀氏は 1964 年生まれの 50 歳、教育社会学が専門で、『多元化する「能力」と日本社会』(NTT 出版、2005 年)で大佛次郎論壇賞(奨励賞)を受賞、『「ニート」って言うな!』(光文社新書、2006 年)をはじめ、『若者と仕事～「学校経由の就職」を超えて』(東京大学出版、2006 年)、『教育の職業的意義』(ちくま新書、2009 年)、『軋む社会～教育・仕事・若者の現在』(河出文庫、2011 年)など、若者と仕事・教育に関する著作を精力的に発表している。

現在の日本で「粗雑な、しばしば事態をもっと悪化させるだけのように見える『改革』が数多く進められている」とする著者が、これでは何も良い方向に進まず混迷や窮状が深まるばかりなので、もっと社会を広々とよく見渡す冷静で地道な営みが必要という観点から、第二次大戦の敗戦以降の日本に焦点を当て、これからの日本社会をどのように立て直してゆくか(=結びなおすか)について提案したのが本書である。

本田氏が示す「戦後日本型循環モデル」とは、「仕事」「家族」「教育」という 3 つの異なる社会領域の間が、きわめて太く堅牢で一方向の矢印によって結合され循環してきた特徴をもつ。日本では、①家族が存続するのに必要な収入は仕事の世界からのみで、「社会保障の支え」はきわめて手薄、学校教育への公的支出の少なさを補う形で多額の費用が家計から投入された、②仕事・家族・教育の関係は三角錐の構造で、〈ヒト〉〈カネ〉〈ヨク〉の矢印が螺旋状に頂点に向

かって上がってゆく(高校進学率や家電製品の普及)、③進学や就職を通して地方から大都市へ若者が出て行く地理的移動(諸資源の吸い上げと集中)、④性別と年齢に応じた役割分担の明確さ、⑤学校・企業・家族は、対外的には厚い殻をもつが、対内的には強い凝集性と同調圧力をもつ(教師－生徒、上司－部下、親－子)という特性を備えていたと指摘する。

そして戦後日本型循環モデルは、「何のために学ぶのか、何のために働くのか、何のために人を愛して一緒に暮らすのか」という人間にとって重要なはずの「教育・仕事・家族の根本的な意味や意義を喪失させていくような機能」を本質的に持っていたとし、この視点を深めることが重要だと著者は述べている。女性の社会参加の度合いの低さ、長時間労働の多さ、正社員と非正規社員の格差、学校教育への公的支出の少なさ、私立大学在学者の多さと奨学金受給率の低さ、高齢者以外への社会保障支出の少なさなどの日本の特徴は、いずれもこの循環モデルに由来するからである。

これまで仕事・家族・教育の三領域に太く堅牢であった矢印は、90 年代以降ぼろぼろに劣化し、生活を支える物質的基盤の「底が抜けてゆく」状態が発生したが、その震源地は「仕事」の世界の変化だという。すなわち、1995 年の日経連『新時代の日本的経営』が、雇用形態の多様化・格差化や労働条件の劣悪化にお墨付きを与え、その影響は、「教育」を終えても安定

した仕事に就けない若者、「家族」を養うのに十分な賃金を仕事から得られない者を増やした。このように社会が形を変えたにもかかわらず、「性別役割分業規範」には未だに大きな変化のないことが、晩婚化や非婚化、少子化の進行を招いており、何とか家族を形成できたとしても、次世代の子どもの教育に注げる資源に大きな差がつくので、困難は増していくばかりであると分析している。

かくして「戦後日本型循環モデル」は維持することが不可能だけでなく、維持することは望ましくないとする本田氏の展望は、「矢印を一方方向ではなく双方向的なものに持っていく」というものである。具体的には、①教育（学校）が家族を支える、②男性も女性も家庭と仕事を両立できるようにする、③担当する仕事の範囲が明確な「ジョブ型」正社員を実現する、というものであるが、その体制は、「人が死ななくても済むぐらいのセーフティネット」と「その人に可能な範囲で、仕事を含む社会的な諸活動に携わってもらうアクティベーション（中間的就労）」という「二枚の布団」から構成されるとしている。

この「新しい社会モデル」が目指すのは、「多様な状態の人々がそれぞれに、安心して活力を発揮することができる社会」であり、その担い手としてはNPOや社会的企業を想定している。そして、「低成長期になって社会に出た世代」（40代前半以下の層）の中に、戦後日本型循環モデルからの脱却や変革を意図的に志向し、力強く行動し始めている人々が多々見出されることに、著者は希望がもてると述べている。

なるほどという指摘も多い。しかし、私たちは「死ななくても済む」レベルのセーフティネットや「仕事を含む社会的な諸活動」があれば、安心して暮らすことが出来るのであろうか？
そもそもセーフティネットが必要になるような「綱渡り」や「空中ブランコ」をやらなくても済むような人生や、誰もが壮年期にはその能力

を社会に活かして働くことで生計を立て、生きがいを感じることが出来るような労働社会を築いていくことこそが求められているのではないか？という根本的な疑問が残る。

北欧の国々をみると、セーフティネットを超えた「普遍主義の福祉」を発展させて、誰もが人間らしく「自由に生きる」ことを可能にする社会保障の在り方を実現しつつある。

本田氏も指摘する、男性も女性も家庭と仕事を両立できるようにする「ワーク・ライフ・バランス」の前提として、そもそも、男性も女性も人間らしく働き生活できるという「ディーセント・ワーク」を実現するための社会改革がどうしても必要であろう。それなくして、「産業界はより具体的な知識やスキルの形で人材要求を表現する必要がある」とかスクール・ソーシャルワーカーなどの人材を拡充して「学校が地域の拠点として、児童生徒のみならずその背後の家庭がかかえる困難を鋭く見出し、様々な社会サービスにつなげてゆく役割を強化してゆく」という展望は成り立ち難いのではないだろうか。

なお、本書刊行後に著者は、『もじれる社会～戦後日本型循環モデルを超えて』（ちくま新書）を出版している。「もじれ」は、よじれるという辞書の意味に、もつれるが混ざり合った「悶々とした感覚」を表す言葉だという。

※

最後に出版社への注文。岩波ブックレットの「ページ数」をうつ箇所が頁の上部の右（左）端になっているので、参照箇所を探すのに迷う。他の出版社も、①左右の頁の端の中央にページ数を置いたり、②ページ数をグレーの丸で覆い見難くしたり、③ページ数に「007」「096」と余分なゼロをつけたり、④文字が小さくインクの色が薄かったりと、デザインばかりが優先され、年配者も多い読者のことを考えないケースが目につく。頁ごとにある「章」のタイトルは頁の上部に、「ページ数」は下部の中央または端に配置していただくと読みやすい。